

自閉症幼児の保育的セラピー（3）

～保育現場における視点～

藤田 久美

（山口短期大学・藤山医院）

1. はじめに

第 53、第 54 回保育学会で、幼児期の自閉症児に対して保育的関係を基盤とした発達援助アプローチの実践（＝保育的セラピー）を紹介した（藤田 2001、2002）。これは、クリニックで出会った子どもと 1 対 1 で遊びを共有する中で生まれた理論である。子どもにかかわる大人が保育的関係を保つことによって子どもが人に対する肯定的感情を持つことができ、その人との関係の中で存在感を感じることができる。子どもは能動性を発揮し、それを大人が受動することによって相互性が生まれる。

2. 保育現場との連携から

クリニックにおいて子どもと親を支援することを通して、保育現場（幼稚園・保育園など）の保育者との連携をしてきた。保育現場において、保育者が子どもとの具体的なかわりを通して、園という共同体の中でその子らしく生活できるよう保育者が懸命に対応している姿に出会ってきた。しかし、保育という場で、保育者の理解の範囲をこえてしまう子どもに出会ったとき、保育者は子どもとの関係や母親の支援に悩み苦み保育的関係の危機に直面する。

3. C 子の事例を通して考える

C 子：C 子は 2 歳のとき自閉症と診断された。ものを投げる、つばをはく、突然叫ぶ、大便を手でこねるなどの行為が周囲の大人を困惑させてきたという。私は、クリニックにおいて、C 子が 3 歳 9 ヶ月の時と出会い、就学するまで週 1 回 C 子との時間を過ごした。（H11 年 11 月 ～H14 年 3 月）

◆クリニックにおいてのかかわり

C 子と出会ったころ、C 子がなぜ大人を困らせるようなことをするのか理解できず悩むことがあった。母親からは、C 子の生まれる前からこれまでのことを聴き、その中で、父親との関係や祖父母の理解不足などの周囲の様子のことについて報告を受けた。C 子とのセラピーの中で C 子の表情から C 子の存在の危機を感じずにいられなかった。C 子と 2 人で時間を過ごす中で、少しずつ C 子の世界を共有することができたと願った。5 回目のセラピーのとき、母親と話しているときに、C 子がおむつにした大便を手につけたとき、私が C 子の着替えの手伝いをし、C 子と一緒に水道で手を洗っているときに、C 子のことをまるごと受けとめたいという気持ちがこみあげてきた。ことばを話さない C 子の思いや願いを理解したいと思った。私は、その日から、C 子のどんな行動をも肯定的に受け止めることができるようにした。そうしなければ、C 子の存在が守れないような気がしたからである。家庭の中で起こることに対しては、母親と共に考えた。話すことや交換ノートに書くという作業（省察）を通して、C 子の母親と共に C 子の理解を深めるよう努めた。C 子と 1 対 1 で過ごす時間の中で、C 子が自分から始めた遊びや C 子の要求（マイナスの表現もプラスの表現も）を丁寧に応えていった。次第に C 子は、ここの場で

私と 1 対 1 で過ごすことを「心地よい」と思うようになってくれたと感じることができた。C 子は能動性を発揮するようになり、指差し・視線・発声さまざまな表現を用いて自分の要求や思いを伝えたり、玩具・うた遊び・絵本などを介して人と相互交渉を楽しむことができるようになった。私にとっても C 子と過ごす「いま、ここ」が充実した時間となった。しかし、ときおり、C 子是不安定なることがあった。そういうとき、C 子は身近な大人に対して自分の気持ちを発信した。それは、表面的に見れば「周囲を困らせる行動」であった。家庭、幼稚園という日常の場においてそれは頻繁に現れ、母親の身体的・精神的疲労は日常的に続いた。

◆幼稚園において

C 子は年中になった 4 月から 5 月にかけて「周囲を困らせる行動」があまりに頻繁に起こるので幼稚園の先生が対応に困っていることを母親から聞いた。金魚鉢やかびんを投げたり、友達の座っていた椅子を倒すこともあったという。友人の髪に大便をつけたことで母親の心は大きく揺れた。障害のある我が子に追加保育者をつけ一生懸命対応してくれている園に感謝しながらも、C 子が起こす行動、クラスの保護者との関係、幼稚園に迷惑をかけているのではないかという様々な思いが母親の不安を高めていた。一方、C 子は、セラピーの中で描いた一枚の絵（幼稚園のバスを描き窓やドアを大きい声を出しながら黒くぬりつぶした）を用いて自分の思いを伝えた。「幼稚園と協力しあっていかなければならない」と感じていたちょうどその時期に幼稚園側から「C 子の対応に困っている。どうしたらよいか一緒に考えてほしい」と相談を受けた。

◆幼稚園と連携して

母親を介して幼稚園に私が訪ねる約束をし、幼稚園に訪問した。設定の保育場面で C 子の様子を見させていただいた後、中庭で C 子をおんぶした担当保育者と話をすることができた。その後、主任保育者、クラス担任、担当保育者と話し合いの時間が設けられた。保育者からは、まず、入園（3 歳児）時からこれまでの C 子の育ちと保育者のかかわりについて話された。そして、昨年度の 3 学期から C 子の頻繁に起こる「大人を困らせる行動」への対応に困惑している事や母親との信頼関係も崩れてきていている事ど、今の苦しい状態を正直に話してくれた。話を聴きながら、保育者は、C 子の成長や担当保育者になつてくれていることをうれしく思える反面、C 子に対して肯定的な感情が持てないことで混乱し、今の、保育の方向性が見えず不安が高まっていることがうかがえた。また、保育者が、C 子から要求される「だっこ」や「おんぶ」に日常的に応えていること、頻繁に起こる行動を予測してしまうことや起こってしまった後の対応などに追われ、身体的にも精神的にも疲れを感じていたようであった。私は、さまざま状況の中で「保育的関係の危機」に直面している保育者に対して何か支援できればと思った。そして、保育者の今の状態に共感し、保育者を肯定しながら、いまの「危機」を乗り越えるプロセスを

共に協力していききたいということを伝えた。さらに保育観察をした率直な感想と、クリニックでのこれまでの経過や母親の思い、家族環境の詳しい事情を付け加えた。

◆その後の経過

私と幼稚園の連携と協力はその後も継続した。主任保育者と C 子の担任が夏休みにクリニックに訪れ C 子のその後の様子や保育者のかかわりを丁寧に話してくれた。保育者は、年度始めに、クラスを作ることに必死になって、C 子の行動を表面的に捉え、「やめさせたい」「困った」という感情ばかりが先にあったことを振り返られた。C 子は、新しいクラス、2 年保育で入ってきた新しい友だち、あわただしい新学期に保育者のあせりも「敏感に感じていたのだろう」。保育者のことばなどから、保育者と C 子の関係が質的に変化したことを確信した。私は、保育者の思いに共感的態度で応えながら、保育者を肯定した。また、母親が、保育者から聞いた保育園の話や、C 子が幼稚園から帰宅して先生や友だちの名前を言うことなど、うれしそうに話されるようになったなどを話し、母親と C 子が保育者を信頼していることを伝えた。

その後、保育者は幼稚園において、C 子の理解者であり C 子の母親を支えるものという認識が次第に強くなったようである。

年長になってからは、C 子は、保育者やクラスの友達とのかかわりの中で、新しい体験をしたり、できなかったことができるようになったりした。具体的な成長が目に見えるものとして表れるようになった。特に、幼稚園においての描画の表現はすばらしいものであった。年長になってからの担任が C 子の描画と C 子へのかかわりについて実践研究に取り組んだという報告があった。

◆卒園まじかの幼稚園を訪ねて

卒園まじかに幼稚園を訪ねた。連携と協力を続けてきた保育者と話をしながらベランダぞいのうさぎ小屋の前でちょこんと座っている C 子を見守る。「ぴーちゃん」と名前を C 子がうさぎの名前を呼ぶと、そばにいた保育者（C 子のクラスの副担任）が C 子にキャベツを差し出す。C 子がそのキャベツを受け取り、うさぎに食べさせる。保育者が穏やかな表情でそれを見守る。そのシーンを見ながら、C 子がクリニックで描いた「うさぎの絵」を思い浮かべた。そこに、クラスの女の子が 2 人やってきて、幼稚園に併設する保育園のジャングルジムに行こうと誘う。そこにいたみんな（私も含めて）は保育園の庭にかけ足で行く。ジャングルジムつきの滑り台では、C 子と友だちと保育者で遊んだ。保育者から、ジャングルジムでの友だちと C 子のエピソードを聞く。帰りの時間になり、お部屋に戻るとき、C 子は担任の先生におんぶをせがみ、要求に応じてもらう。お部屋では帰りのお集まりがはじまり、絵本や手遊びをみんなが集まっている場所より少し離れた場所で副担任の先生と一緒に、同じ手遊びを楽しむ C 子。私は、壁面に飾ってある C 子の絵のそばで C 子の様子を見守りながら、C 子の存在が確かにあり、クラスという共同体の中で自分らしく生きている C 子を思い胸が温かくなった。

5、保育の可能性

保育の場で育つ子どもの姿から、子どもにかかわるものの重要な課題である「子ども理解」は、子どもの育つ日常の中でより深まっていくものだということを教えられる。そして、子どもと日常を共にする大人は、子どもと共に生きる「いま」を充実した豊かなものにしたいと願う。だから

からこそ、理解しにくい子どもに出会ったとき、保育者は悩み苦しむのであろう。目の前にいる子どもと繋がりたい、なんとかその子と過ごす時間を充実させたいと願うからこそ生まれてくる自然な感情であると思う。このような過程を丁寧に見つめ振り返る作業ができたならば、保育の中に大きな可能性が芽生えるであろう。なぜならば、保育という子どもの生きる日常の世界には子どもの育つ要素が溢れているからである。子どもは、保育者に支えられながら、心の動く体験、友達とのかかわり、要求を出すことを肯定的に受け止めてもらう心地よい体験、できなかったことができた体験をする。信頼ある保育者との肯定的な関係の中で、子どもの行動は意味のあるものとなる。保育的關係の中で保障される「発達の体験」である。

6、保育の場における課題

自閉症の子どもに限らず、理解しにくい子どもや気になる行動をする子どもが目の前に現れたとき、保育者は混乱し、これまでの、子ども観や保育観が根底から揺さぶられることになるであろう。これまで行ってきた保育の見直し、他の保育者との共通理解、母親との関係、自分自身をみつめる作業、専門機関との連携など、さまざまな保育的課題にぶつかる。

また、保育はひとりひとりの発達を保障する場でありながら、集団の場という形態であり、さまざまな関係や出来事が同時に起こり、ひとりの子どものために一定の時間を作るのは困難かもしれない。しかし、理解しにくい子どもだからこそ、保育者は、保育的關係を構築するという課題に向き合わなくてはならないと思う。保育の中で、理解しにくい子どものことを「肯定的に」受け止めていくことが、保育の最も重要な専門性ではないかと考える。これを可能にするためには、その子ひとりに向かい合い、共に過ごす時間と空間が必要である。いわば「臨床的視点」である。保育者のこのような視点をつくるには、その子どもとの具体的なかかわり（保育の実践）や保育記録や振り返り（省察）が必要である。継続的な保育の実践と省察の過程においてこそ、保育者が自分の保育を見直す視点が生まれ、子どもの理解が深まるのである。さらには、保育者の人間的な成長をも可能になるであろう。子どもが保育者を信頼しその人と共にありたいと願うならば、子どもの能動性は発揮され、保育者との間に相互性が生まれる。子どもは、保育者と共にいる中で自分らしくあることに自信を持ち、保育者との具体的な日々のかかわりの中で新しい自分に出会うことが喜びとなり、よりよい自分を作ろうとする。もし、保育的關係が保障されなければ、子どもの基本的なく発達体験が奪われることになる。

保育の他の問題（行政支援や保育支援システムなど）をすぐには整えられない現状がある。しかし、今、目の前にいる子どもとともに生きる中で、子どもも大人も、共に、充実したより豊かな時間が過ごせるよう大人同士（親、保育者、他機関のもの）が協力し合うことがまず先決だと思う。今後も、保育現場の保育者と共に考えていきたい。